

四 自然関係の語彙

1 気象・季節を表わす言葉

日本人と天候

日本語には自然を表わす語彙が多いというのが定評であるが、これは日本の自然が変化に富んでいることと、もう一つ日本人が自然に親しみ、強い関心をもって来たことを意味する。

玉村文郎に発表があったが、「月」というと、日本人は「雲」や「芒^{すすき}」や「三日月」のようなものに連想するが、英語系の人はず、「探検」という言葉を連想するのだそうだ(『言語生活』昭50・1)。アメリカ人にとっては、ピューリタンの時代から *wildness* は人間の支配の及ばない悪魔の住み家であって、彼らは *civilize* された *garden* を善しとしたという。その点、自然のふところに抱かれて生活することを理想とした日本人は大いにちがう。

和辻哲郎は、名著『風土』の中で、日本の環境をへモンズーン地帯と呼んだが、これは四季を通じてさまざまなものが空から降って来る地帯を意味する。日本はいつ雨が降ってくるかわからない。日本人は、そのために毎日天候を大変気にして生活しているが、南米のペルーあたりでは、「天気予報」などというものはない。雨は降らないにきまっているからだ。日本人どうしが逢うと、まず、天候のことを述べてあいさつすることが外国人にしばしば不思議がられるが、日記帳も、何月何日、何曜日、とあるその下に「晴」とか「雨」とか書くのが普通であり、これが子供の夏休みの宿題帳に及ぶ。マイクローフォンの試験に、

本日は晴天なり、本日は晴天なり……

と、天候のことを言っているのも、いかにも日本的である。

そういうことから雨の種類を表わす単語が多いのは当然で、「春雨」「五月雨」「夕雨に関する語彙」

立「時雨」「菜種梅雨」「狐の嫁入り(日照り雨のこと)、最近はまだ、「集中豪雨」とか「秋雨前線」とかいいうのもあり、日本が雨のよく降る国であることを表わしている。J・スワードは、日本語の雨の名は四〇を越すと驚いている。

このうちの「春雨」はまだいいが、「五月雨」とか「時雨」は難しい漢字の宛て方をする。これは昔、日本人は和語を何でも漢字で書こうとした。「雨」は中国でも降るから「雨」という漢字はあるが、「五月雨」「時雨」にピッタリの中国語はないので、適切な漢字がなく、その

意味を考えて、「さみだれ」とは「五月に降る雨だ」とか、「しぐれ」とは「時どき降る雨だ」とか解釈して漢字をあてたものだ。

こういうふうであるから、雨の種類だけでなく、一般に雨に関係する語彙も日本語には豊富である。たとえば「雨間あまひ」「雨脚あまひ」「雨やどり」「雨ごもり」「雨曇り」「雨垂れ」……というような単語がある。これを英語で言おうとすると、みんな単語では言えない。「雨やどり」などは、日本ではごく普通の言葉であるが、taking shelter from the rain となってしまふ。「雨天顺延」という言葉を英語に訳すと長くなるというのも、この線に沿った事柄だ。その男(女)と一緒にいくと必ず雨に逢う男(女)のことを「雨男(女)」と言うが、こういった言葉は他の国の言語の発想にはなさそうだ。

四季の変化

さきほどの「五月雨」や「梅雨」という言葉に注意していただきたい。この語は両方とも同じ雨をさすが、「五月雨」の方は「五月雨が降る」とか「五月雨がやむ」とか言う。それに対して、「梅雨」の方は「梅雨に入る」「梅雨があける」と使う。つまり「五月雨」の方は雨そのものをさすが、「梅雨」の方は、五月雨が降る時季を言う言葉なのだ。これはやはり雨が、ことに「五月雨」が日本人にとって重要だということを表わしている。

ところで日本語では、「春の雨はシトシト降る」とか、「夏の雨はザーッと降る」とか言う。秋から冬にかけて降る「時雨」という雨は「シヨボシヨボ降る」と言う。つまり降り方がそれ

それ違う。「時雨」という言葉は辞書では、「秋から冬にかけて降ったりやんだりする雨」とだけしか書いてないが、われわれがこの言葉を聞くと、雨の降り方以外に、肌寒い感じ、山の木の葉が紅葉することを連想する。昔の人は、奥山で雄の鹿が雌の鹿を慕って鳴く声なども一緒に連想したはずで、そういったことから、一つ一つの雨の名前は、それぞれわれわれに豊かな連想を呼び起こす。このことから(俳句)という、世界で一番短い形の詩が日本に出来ている。風にしても、たとえば「春風」、夏の「涼風」、「秋風」、冬の「木枯し」があって、これらはやはりそれぞれ違った趣をもっている。「月」のようなあの冷たい天体でも、日本では四季に応じて変化する。「おぼろ月」といえば春の月、「名月」といえば秋の月に限る。

「歳時記」といった本には、「水ぬるむ」「山笑う」「風光る」以下、季節を表わすたくさんある単語が出てくるが、きわめて日本的な語彙だ。春の日を「日永」というのもおもしろい。「日永」をさかさまにした「永日」という言葉は中国語にもあるが、中国では夏の日の意味だという。それが日本の和歌・俳句で「日永」といえば、春のことなのは、春の日の暮れがたいのを目が永いと感じた、そこに日本人の诗情がある。日本人の季節感はこの語によくあらわれている。短夜(夏)の夜・夜長(秋)の夜・短日(冬)の日、いずれもおもしろい。

日本の暦 日本的一年というのはそのように変化しているの、日本の暦とアメリカの暦の違いを比べてみると、大きなちがいに気がつく。アメリカの暦をみると、「聖燭節」

とか「聖ヴァレンタインの祭日」「ワシントン誕生記念日」というように、実にこれは人間に關する暦である。日本の暦はそうではない。日本の暦には、そういうものも載っているが、それ以外に、「立春」「八十八夜」「梅雨の入り」「二十十日」というようなものが並んでいる。これは季節の移り変わりを表わすもので、やはり日本人の生活をよく反映している。

年の始めになると、書店には正月の衣装を着た女性や子供の写真を表紙にした雑誌が並ぶ。四月に小学生が学校へ上がると、国語の教科書には桜や菜の花の絵の教材が載っており、音楽の時間には、まず「春の小川」とか「蝶々」の曲を習う。アメリカの教科書など、ちっとも季節に対する配慮がうかがえないのとは大きくちがう。

季節の変化 ところで、『徒然草』には、「折節おりふしの移り変るこそ……」という、四季の風物を観賞した名文があるが、著者兼好は、春そのもの、夏そのものよりも、春から夏へ、

夏から秋へ、という季節の推移に関心を払っている。これは、注意すべきだ。「春めく」「秋めく」のような単語は、中国語にも英語にもない。中国語では、「有春意」とでもいうほかはない。こんなことから、日本では、季節の推移を告げる風物を重要視する。「初霜」「初雪」「初雷」「初時雨」などは、この意味で日本的語彙である。食べ物に関してハシリ・シュン・タバゴロは、他国語に訳せないという。「季節はずれ」も日本ならではの単語であらう。

早春を「春浅し」という。この「浅し」という言葉は、「夏」や「秋」などにはつかない。日本人は冬を白黒だけの季節と感じた。春、夏、と進むにつれて色彩が豊かになるが、早春のころはまだ淡彩である。これを「春浅し」と言ったので、自然に対する観賞力を示している。しかし、考えてみると、日本でも、気象・季節に関する語は、現在次第に影を薄くしつつある。昔は夏の季の物だったキュウリやナスビが一年中出まわり、バラやカーネーションのような、何も季節を感じさせない花も多くなった。俳句の季題というものも弱くなりつつある。しかし一方、

万緑の中や吾子の齒生え初むる（中村草田男）
 のような句から、新しい季語が生まれることもある。

2 地形・水勢を表わす言葉

地形・水
 勢の言葉

自然を表わす言葉のうち、地形・水勢をあらわすものは、日本語に豊富である。これは、日本の地勢が変化に富んでいるせいで、以前、汽車の速さを表わす小学唱歌に、「今は山中、今は浜……」というのがあったが、しかし中国やシベリア大陸あたりではいくら汽車が速く走っても、窓外の景色はこうはならない。この歌詞は、日本の地形が変化に富んでいることを表わすといえそう。

柳田国男の『地名の研究』によれば、明治年間に地理学者が地形を呼ぶために、「流域」とか「分水嶺」とかいう漢語を作りだしたのはおろかだったという。つまり、たまたま中央の学者がそういう単語を知らなかっただけで、日本語には、元来、カワチ・タワ・ハナワ・ユラ・ナル・ホキ・ノゾキ等々、地形をあらわすおびただしい単語があったのだという。これは地形の複雑な日本国土に生活し、その制約を受けることの大きい日本人としては当然だろう。「坂」という何でもない日本語も、他の言語には少ない単語である。少なくとも英語やフランス語にはない。サイデンステッカーによる『雪国』の翻訳では「坂」を「三」と訳してあったが、「坂」そのものを言いたい気持はないのだろうか。パリのモンマルトルの丘に登る坂に名前がないのは不思議である。日本では東京など「神楽坂」「二口坂」「団子坂」などいくらでも坂があるが、何か昔の信仰と関係があるのだろうか。

海と川の言葉

周囲を海で囲まれた国土に育ち、それを生活の場とする日本人は、オキ・ナダなど、それにあたる中国語のない言葉をもっている。従って「沖」というような漢字を新造したり、「灘」のような他の意味をもつ漢字を転用せざるを得なかった。川のカミ・シモも日本語的で、中国語には相当するものがなかった。そのため漢字もウエ・シタの字を流用している。思うに、もし漢字というものが日本の発明であつたら、さぞかし部首にはウミとかカワというような文字が並んだことだろう。そして、オキ・ナダはウミ偏に「中」と

か「難」とかの字を書き、カミ・シモはカワ偏に「上」「下」の字を書いたかもしれない。エ(江)・セ(瀬)・ツ(津)・ス(洲)なども、日本語では一拍の語で表わす重要な単語だった。

ハマヤイソヤナギサなど、海岸を表わす単語も日本語は詳しいようだ。英語に sea-holly という植物がある。海の中にいる日本のウミユリやウミシダのような下等生物の名かと思ったが、実は海浜に生えるアザミのような植物だそう。日本だったらハマアザミともなるところだった。

海の中の場所のちがいについては、中国語もそういう区別をする単語をもっていない。望月八十吉の『中国語と日本語』によると、「沖」「灘」や「浦」といった言葉を、中国の辞書にはこんなふうの説明している。

沖——離岸較遠的海上　浦——波浪平静的灣　灘——波濤洶涌的海面

水と湯

日本の自然のなかで特色をなすものの一つが「水」である。仏教で、極楽には蓮の池があると考えたのは、インドには水が乏しいからである。日本では「湯水のごとく使う」という諺で惜し気もなく水を使い捨てる習慣を示しているが、『ことばのくずかご』によると、これがアラブの言葉では「ケケケチ大事に使う」という意味だそうである。また「湯」という言葉があることが日本的で、中国の「湯」はスープのことだという。「湯」を表わす文字はないようで「開水」^{カイシュイ}「白水」^{バイシュイ}というのが「湯」のことだそう。

英語では「湯」のことを hot water と言う。水の一種である。漱石の『坊っちゃん』に、坊っちゃんが道後の湯に行つて浴槽で泳ぐところがある。そこを A・ターニーは英訳して、
The water was about breast-high……

温泉水滑^{ラカニシテ}　洗^ラ「凝脂」

とあるが、日本人ならば、「温泉湯滑ラカニシテ」と言いたいところだ。中国人も温泉のあの熱い湯を「水」と見ているのである。

日本の水　日本人は、水という時には、天然自然にある、しかも湯と違って冷たいものという感じを持っている。なぜ日本語には、「湯」という単語が別にあるのか。それは、日本は世界で有名な温泉国だからである。日本人の先祖がこの国土に渡つて来た時に、地上を流れるたくさんのお水と、地下から勢いよく湧き出している温泉を見た。そこであの熱いのは「湯」だ、この冷たいのは「水」だ、と区別したものと想像される。

ところで、日本の水はきれいなものであり、清冷なものだ。山へ行くと、谷川を水が流れている。思わず立ちどまってそれを掬って飲むことがあるが、あの光景には中国人などびっくりする。われわれは「滝」という言葉を聞くと、きれいな水が高いところからサーッと落ちていく、あれを滝だと思う。が、有名な世界の大きな滝、南米のイグアスの滝、アフリカのビクト

リアの滝などは、みそ汁みたいな水がダボダボ、ダボダボ、だらしなく流れているだけで、それは雄大ではあるが、きれいなものでは決してない。

「水」に関する日本語をいくつかあげてみると、「水玉」「水鏡」「水盤」「水滴」……、いずれもきれいな感じがする。「浅瀬」「苔清水」などという言葉も美しい。

国際基督教大学の日本語主任教授だった小出詞子ふみこによると、アメリカの学生には、ニゴルという日本語の意味がなかなか分からせにくかったという。muddyという単語はあるが、これは日本語のドロミズぐらいにあたる。

二人して掬すくべば濁る清水かな（蕪村）

「濁る」の感じは、not cleanだろう。「ささ濁り」などという言葉はますます難しかりう。

湿気の言葉

水に関連してもう一つ注意すべきは、湿気に関係した言葉である。ヌレル・シメル・シトル・ウルオウ・ソボツ・ホトビル……濡れ方に応じての言葉の分化は日本的だ。ポルトガルのモラエスは、明治期に日本へ来て驚いたことの一つに、日本人が入浴のあとに濡れたタオルで体を拭くことをあげている。たしかにしばらくた手拭いで体を拭いただけでは、ヨーロッパ人は気が悪いであろう。擬態語は、元来、日本語に多くて有名だが、湿潤に関するものだけでも、シッポリ・シットリ・ジメジメ・ビショビショ・グシヨグシヨ・ビチャビチャ・ジトジトなどいくらでもある。

3 天体と鉱物の名

星の言葉

天体の名に移ると、早く新村出が『南蛮更紗なんばんさら』の中で指摘したことがあるが、星の名に関して、日本語は貧弱である。日本人の使う星の名は、金星・火星・北極星等、たいてい漢語だ。ことに星座名が少ない。これは中国語・バビロニア語・アラビア語・ギリシャ語あたりに対して顕著な特徴らしい。

野尻抱影・内田武志によって、日本の農民や漁民の間に使われている星の名がかなり拾われたことがあったが、しかしそれも、クラスキボシ・オヤニナイボシというような、複合語——二次的な名ばかりであった。

百科事典などで万国旗の図を見ると、アメリカ合衆国をはじめとして、星をあしらったものがびっくりするほど多く、アフリカの北部の国など、ほとんど軒並み星をつけている。一方、日本の家紋などを見ると、植物に関連したものが圧倒的に多いのに対して、星を扱ったものはほんのわずかなもので、好みのちがいが明らかである。

これは日本人がほかに関心をむけるものが多く、星にあまり関心を向けなかったからであろう。もし、「俳句」というものが、日本のものでなくて、エジプトあたりのものであって、歳時記が編集されたとしたら、さぞかし星の名、星座の名が並んだことであろう。

月の語彙

日本人が強い関心をもったのは「月」である。日によって「三日月」「十五夜」のような名をもち、昔はさらに、十六日の月を「いざよい」、十七日の月を「立待たちまちの月」、十八日の月を「居待いままちの月」、十九日の月を「寝待ねまちの月」と呼び分けた。夜が明けたあとまで天空にかかっている月をいう「有明ありあけ」は「百人一首」に四首も詠まれた。

これは闇夜に月の光が重要な照明のもとだったことを表わすが、古来、日本人にとって月は、花・雪と並ぶ自然観賞の御三家だったからである。江戸時代の医者・橋南谿は、その著『北窓瑣談』の中で、オランダ人から、「月のようなあんな殺風景なものを見て、何がおもしろいのか」と聞かれて驚いたことを述べている。「月見れば千々にもこの悲しけれ……」(大江千里の歌のように、日本人にとって月は悲しい心を慰めてくれる最上のものだった。

鉱物の語彙

自然を表わす語彙でもう一つ、天体名とともに固有名が乏しいのは、鉱物名である。和語のものは、スズ・ナマリなどほんの少数で、キン・ギン・ドウ・テツなど、非常に重要な鉱物まで漢語を使っている始末である。コガネ・シロガネ・アカガネ・クロガネ……という和語はあるにはあるが、金・銀の訳語として出来たものだろう、と言われている。磁鉄鉱・黄銅鉱・水晶・方解石等、中学校の理科の授業で習う鉱物の名は、たいてい漢語だった。日本人は中国人と交際してはじめて鉱物の利用を覚えたかのように、石で家を建てるようなことをしなかった日本人の行き方を反映している。

4 動植物の言葉

日本人と植物

筆者が小学校の頃、地理の時間に「地理付図」というのを使ったが、その中に地勢図というものがあった。その書き方がどうも筆者は気に入らなかった。というの、その地勢図では高いところを茶色に塗ってあって、低いところは緑色に塗ってあるのである。筆者は、これはおかしいじゃないか、山はみんな緑じゃないか、人間の住んでいる平地こそ茶色じゃないかということ、大いに不満だったのであるが、それが戦後、外国を訪れてはじめてわかった。

日本から外へ出ると、自然はまさにあの通りである。われわれは「南国スペイン」というような言葉を聞くと、緑豊かな国土をつい想像する。ところが、実際に行ってみると、飛行機の上空から見たスペインの国土は、山は全部ハゲ山・岩山で、だいたい茶色である。つまり、地勢図というものは、日本以外のヨーロッパか、アメリカあたりの自然をもとにしてつくられたものだ、ということに気が付いた。日本の自然は特別で、植物が多い、ことに木が多いということがわかる。

日本はまことに木の国で、したがって日本文化は木をたよりにした文化である。家屋も多くは木造で、家具も木製品が多い。食事の時に味噌汁は木製の椀によそい、右手で食物を口に運

ぶ箸も、割箸のような木製のものがある。このことから日本人は木に親しみ、木に関するたくさんさんの単語を作った。「木だち」「なみき」「木かけ」から、「木の^こ下^{した}間^ま」「木もれ日」「木の間隠れ」などになると、英語には該当する単語がなく、もし訳せば数語を費すだろう。「枝ぶり」については寺田寅彦が、英語に訳せまいと言った。「林」と「森」は中国語で言えば、ともに「樹林子」となるそうだ。

日本語に(花が)サクという動詞があり、多く使われるが、この「咲」という漢字はもともと「笑う」という意味の字である。それを日本ではサクを表わす文字として強引に流用しているもので、このようなのを(借訓)と呼ぶ。中国語でサクは「開」の語を用い、ほかのものが開くのと区別しない。麻雀の「嶺上開花^{リンシャンクワホウ}」の「開花」だ。英語の bloom は「花」ということばの動詞化だ。チルも日本語らしい単語で、中国語では、花がチルことは「落」であらわす。英語でも fall だ。少なくとも「咲く」と聞けば花を連想し、「散る」という動詞を聞けば、日本人は花か秋の葉のことだと連想する。そうして日本語には、ことに芽が出ることを言うたくさんある単語がある。「芽ぐむ」「芽ばえる」「芽だつ」「芽ぶく」「萌える」……。こういう語彙を使い分けるのが、日本人は好きなのだ。

木の名・草の名 さて、日本は植物の個体も多いが、種類がまた多い。ヨーロッパ全土に自生する木の種類より、日本一国に自生する木の種類のほうが多いという。日本の秋の紅葉を

昔から「紅葉の錦」と形容したが、これは木の種類が多いために、一つの山が、紅・黄・橙・緑のようにまだらに彩られることを表わす。

日本人はこういう木の各種類に対し、その特色を見極め、それぞれちがった方面に用いた。仏像にはクスノキを使い、家の天井や柱にはヒノキを使い、酒樽にはスギを使い、手桶にはサワラを使うのはそれである。このようなことから、日本人は木のちがいに注意を向け、木の一つ一つに名前をつけた。そういうことから日本語には、マツ・スギ・ヒ・カヤ・マキ・モミ・ツガ・クリ・シイ・カシ・ナラ・ブナ・ムク・クワ・クス・ホオ・ナシ・ツゲ・カキ・キリ……など、これ以上分析を許さない、いわば一次的な名——複合語や派生語でない名をもつおびただしい木がある。漢和辞典を見ると、木偏のところにおびただしい数の(国字)、日本で作った文字が並んでいる。魚偏について、第二位であるのは無理もない。

竹と草

植物のうちで特に重要なものの一つに「竹」があり、明治期にイギリスからやってきた日本学者チェンバレンは、日本で竹で作れないものはないといって感嘆した。

「木に竹を継いだような」という句でもわかるように、竹一種があらゆる一般の木に対立して存在しているように考えられているほどである。日本人は竹に限らず、ササ・アシ・ススキ・スゲなど、花が咲いても地味な、葉の長い草に生活を依存することが多かった。その結果、これを細かく分け、時にはおなじススキを花はオバナ、刈り取る時はカヤというように、二重、

三重の名をつけたものもある。ススキやアシの芽の出るのを表わすことばとして、「つづくむ」という単語があるのも奇抜である。

欧米人が植物についてののきなことは驚くほどで、P・パーマーは、『現代言語学紹介』の一節に、「私は pine(松)と fir(樅)と spruce(えぞ松)と larch(から松)とのちがいを知らない」と言っている。かれらは植物の名の多いのは未開民族の言語だという考えをもっているから、恥とは思っていないだろう。「夜桜」「遅桜」「葉桜」「桜吹雪」「桜月夜」のような単語も、花を愛する日本人にしてはじめて出来た言葉である。

日本語には草の名も多く、何千という草の名前がスミレ・ツボスミレ・タチツボスミレ・ニオイタチツボスミレのように大部分、和語で付けられているのは注目される。

日本人は外国人より一つ一つの草に親しみ、その個性を知っている。島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の一節、

緑なすはこべは萌えず

は、どうしても「はこべ」でなければいけない。「はこべ」はつまらない雑草であるが、早春にいち早く青々と茂る随一の草だ。森鷗外の『山椒大夫』の一節、安寿と厨子王が山椒大夫のもとにひと冬過ごしたあと、連れ立って山路を歩くところに、一輪咲いているスミレに目をとめるところがあるが、あそこも二人の運命を象徴するものとしてスミレは動かない。

植物に対してそうであると同時に、日本人は虫にも大変詳しい。これは、池田

摩耶子の『日本語再発見』に出ているが、彼女が、アメリカで、川端康成の

『山の音』をテキストとして日本語を勉強する学生に教えていたそうだ。その『山の音』の中に「八月十日前だが虫が鳴いている」という一節がある。アメリカの学生たちは、「虫が」というところを、何かノミかシラミが鳴くのかと思つたというのである。これは秋の虫が鳴くのだと教えてやったら、みんなキョトンとした顔をしている。そのとき、女史が耳をすましてみたところが、教室の外で何か虫が鳴いていた。そこで学生に対して、「今、聞こえるでしょう。あの虫、あれがここです」と言った。そうしたら、学生たちは初めてそれに気がついて、「なるほど、そういうえぼのような音が聞こえる」と言った、ということを書いている。

向こうの人にとっては、虫の声というのは雑音と同じように聞こえるようで、序章にある角田忠信の学説は、この話からヒントを得たという。しかし中国人も秋の虫を喜び、『詩経』にすでに虫の声を愛する詩が二篇見え、杜甫にも秋の虫を詠みこんだ作品がある。北京の街角では秋になると、「蠨^{クモケル}々兒」と呼ぶキリギリスのような虫を籠に入れて売っているから、日本人だけが虫の声を賞するとは言いがたい。

虫の言い分け

ドイツ人は、日本人がスズムシとマツムシを聞き分けることに感心するという話を、兼常清佐が書いていた。なるほどスズムシ・マツムシ・コオロギ、みん

な和独辞典で引くと、グリレという同じ単語が出てくる。これに対して日本人は、飛んで跳ねる虫を、スイッチョでもキリギリスでもイナゴでもいちいち細かく呼び分ける。

アメリカ人に言わせると、トンボは dragonfly で、グロテスクな気持の悪い動物だと思っているそうであるが、日本人にとってトンボは子供の時から親しい虫の名前で、オニヤンマ・ギンヤンマ・ムギワラトンボ・シオカラトンボ・アカトンボ・オハグロトンボなど、戦前の子供なら七種か八種の呼び方を区別して知っていた。ムギワラとシオカラは同じトンボの雌と雄であるが、ムギワラをシオカラのおとりにするところから、子供でもそれを心得ていた。雌雄を言い分けるのは、英語のオックスとカウのようなものである。

トンボと並んで蟬も日本人には親しいもので、戦前の子供は、アブラ・ニイニイ・ミンミン・オーシーツク・ヒグラシの五種類ぐらいは常識だった。蝶などは、どこの国でも関心をもつかと思うと、フランス語では「蝶」と「蛾」を区別しないで両方ともパピヨンと呼ぶという。

鳥の語彙

虫については、鳥の名も日本人は得意で、ツル・ハト・サギ・カモ・ガン・キジ・モズ・シギなど、たくさん的一次語の名前をもつ鳥がある。ことに興味があるのは、日本人は欧米人とちがって、家畜の鳴き声をちがう動詞で呼び分けることをせず、代わりに鳥の鳴き声の方に注意を向けてきたことだ。小鳥には「さえざる」、鶏には「時を作る」、ウグイスには「経を読む」、ホトトギスには「名告る」、クイナには「たたく」と言うのがそれだ。